

現代の女流文学

編集 女流文学者会

3

有吉佐和子

津村節子

田辺聖子

広津桃子

保高みさ子

森田たま

林芙美子

編集 女流文学者会

3

有吉佐和子

津村節子

田辺聖子

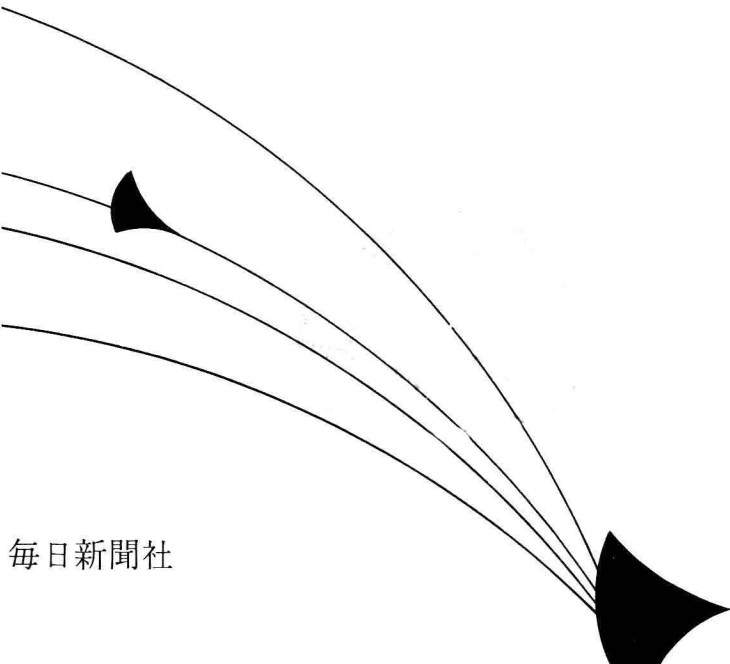
広津桃子

保高みさ子

森田たま

林芙美子

毎日新聞社



現代の女流文学 第三卷

定価 一二〇〇円

昭和四十九年十月十日 印刷
昭和四十九年十月二十日 発行

編集委員	編集員	編集員	編集員
女流文学者会	円地文子	佐多稲子	

編集人 桑原隆次郎
発行人 朝居正彦
発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒四五〇 名古屋市中村区堀内町
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

図書印刷 大口製本

〈検印省略〉

現代の女流文学
3

目
次

有吉 佐和子

華岡青洲の妻
5

津村 節子

玩具
107

田辺 聖子

感傷旅行
135

広津 桃子

春の音
175

保高 みさ子

ある晴れた日に
195

森 田 た ま

東京の女・大阪の女

芥川さんのこと

219 209

林 芙 美 子

稲 妻

227

中 村 佐 喜 子

女流文学者会のあゆみ 3

313

松 原 新 一

解説 「家」と女性

317

装
幀
安
東
澄

華岡青洲の妻

有吉佐和子

有吉佐和子

昭和六（一九三二）・一・二〇。和歌山市に生まれる。東京女子大短大英文科卒。在学中「演劇界」の懸賞論文に「俳優論」で入賞。同人雑誌「白痴群」を経て「新思潮」（第一五次）に参加。昭和十一年、「地唄」で「文学界」新人賞を受け、芥川賞候補にもなる。翌年発表の「白い扇」は直木賞候補。同三四年、米國サラローレンス大学へ留学。同三七年、神彰と結婚（三九年離婚）。同三八年「香華」で第一〇回小説新潮賞を受賞。同四〇年、景教の研究のため北京大学に留学。同四二年「華岡青洲の妻」により第六回女流文学賞を受賞。同四三年、ニューヨーク旅行。「恍惚の人」（昭四七）がベストセラーになる。

その他著書に『江口の里』（昭三四）、『私は忘れない』（昭三五）、『三婆』（昭三六）、『有田川』（昭三八）、『非色』（昭三九）、『日高川』（昭四一）、『不信の時』（昭四三）、『出雲の阿国』（昭四四）、『芝桜』（昭四五）、『有吉佐和子選集』（昭四五～四六）、『孟姜女考』（昭四八）などがある。

加恵は八歳のとき初めて於継を見た。話をきかせてくれた乳母の民に早速ねだって隣村の平山へ出かけたのは夏で、めざす家の前庭には雑草が生い繁り、気違い茄子の白い花々が暑苦しい緑の中で、妙に冴え冴えと浮んで見えた。それは古ぼけた家の軒からふと外へ出て来た於継の色白の横顔と、あまりにもよく似ていた。

「ほれ、ほれ、嬢さん」

杵殻の牆の前で、民は振返って得意そうに小鼻をひらいてみせたが、加恵は頷くことも忘れて、庭に打水している於継の美しさに見惚れていた。

その話というのは、於継が川向うの伊都郡丁之町の松本家から上那賀郡名手の平山にある華岡家へ嫁いだ経緯である。温暖の紀州は殊に平野から紀ノ川添いに北上する一帯の村邑を穩かに豊かなものとしていたから、徳川治政の平和な時代に、草深い名手荘では、村人たちの間で長く話題になるような事件は減多に起らなかつた。その代りに、一つでも起れば

これは消えることなく口から口へ親から子へと語り継がれていく。於継が平山にきたのは宝暦の半ば頃であつたから、それからまだ十年そこそこしか歳月は流れていず、話は登場人物が実在しているだけに一層ことあるごとに女たちの口によつて繰返され、今では名手荘内で知らない者はいない程になつてゐる。丁之町の松本新次郎といへば、名手の妹背家とは家格の点でこそ較べものにならないけれども、地主である他に藍屋や染色業へも手を拡げてしかも堅実に取仕切つてゐる評判の高い家であつた。於継はその女であつたが幼いときから才色の誉が高かつたのを、適齡期に到つてひどい皮膚病に冒され、松本家では金にあかして医者に診せたが彼らは悉く匙を投げた。ところがその話を聞いた華岡直道が、紀ノ川を渡つて松本家の門を叩き、必ず治癒してみせるがその晩には於継を自分に娶らせほしいと云つたものだ。松本家としては、あまり評判はきかない田舎医者であつたが薬にもすがりつきたい折柄、直道の交換条件を鵜呑みにして治療を任せた。そして結果は、於継が貧乏医者の家に嫁入ることになつてしまつたのである。

本来ならば、不治と云われた病を全治したのであるから、それは華岡直道の名医ぶりを伝える挿話になる筈であつたのに、そうならなかつたのは、直道にかなりの大風呂敷という性癖があつて地元では不徳が災し、この話も彼のためにはあまり好意をもつて迎えられなかつたのと、もう一つには物語の女主人公として於継が話以上に美しく賢かつたからである

うか。その話のおしまいには誰でも、まあ一度於継さんを見ておいなあえ、それはそれは美^{うつく}ついいおひとやえ、と云つて結ぶのが常であり、そうすると聞き手は忽ち興味を釣上げられて平山まで出かけてしまひ、加恵と同じように、実物が想像以上に美しいのに一驚するのであった。

そのとき加恵は八歳だったが、於継はたしか三十そこそこで、その頃の常識では女の盛りを過ぎた年齢であつたのに、幼い加恵の目にも於継はそんな年齢を感じさせなかつた。夏の盛りに手織の細かい縞木綿をびちつと着附けていて、締めた細い帯が形よかつた。何よりも目の奥に残つたのは、花のように白い肌と、一筋の後れ毛もなく今結いあげたばかりのように艶やかな丸髻であつた。肌の白さに強められて髪の色も一層黒々として、青い眉は昨日剃つたばかりの新妻のように鮮^{あざ}かで初々しくさえ見えたのを、加恵ははっきりと覚えてゐる。決して早熟な娘ではなかつたのにこんなことを記憶しているのは、それだけ於継が見事だつたからだろう。その目であつたか、翌日であつたか、加恵は母親にこのことを告げた。悪いことをしたわけではないから隠す必要はなかつたし、それに誰かに云わなければ胸に溢れている感動のようなものが治まらなかつた。母親は領きながら娘の話をきいて、於継の美しさには充分同感を示した上で、こんな言葉をつけ加えた。

「美^{うつく}ついいこともさりながら、賢い女やというて誰でも褒めんものはないのやして。どのように賢いのやら知らぬけれど

も、知るひとは皆が皆そない云いなるえ」

加恵の感動はこのときから憧憬を育て始めた。あれだけ美しい上に、誰もが褒めるといふほど賢いのだ。女として、これ以上に理想の在りかたがあるだろうか。加恵の幼い胸の中で於継を崇高なものとしてあがめ導ぶ気持は信仰に似て齡とともにふくらんでいった。何分にも幼くて、まだ娘心の生れない以前に受けた感動であつたから、加恵は同性の妬み心や、自分が決して並外れた美しさも聡明さも持つていないというひけめも覚えることなく、素直に、だから一層烈しく於継を慕つてゐた。

平山は隣村といつても、市場村の妹背佐次兵衛の女であつた加恵には、それ以後於継を見る機会は滅多になかつた。それというのも妹背家は近郷の地主頭と大庄屋を代々勤めている名門であり、藩主が伊勢路へ往復するときの宿と定められていたので、通称を名手本陣と呼ばれるほどの家柄だつたから、土分の娘が百姓娘のように敵道を駆けまわるような真似は許されていなかったからである。それでも妹背家の家風は堅実で、加恵は読み書きの他に裁縫も掃除の作法も厳しく躰けられた。祝儀不祝儀の客寄せには台所の手伝いも子供の頃からさせられていた。佐次兵衛も派手な性格ではなかつたし、母親は嫁にきてすぐ稽古事はほどほどでいいと気がついたという自分の経験からも、加恵には実際的な教養を積ませようとしたのである。本陣を承つてゐるときには、一品でも娘の手料理を紀州藩主の膳に供させてもらうのが、佐次兵衛

夫妻の後の自慢になった。葵の御紋のついた膳部を捧げて殿さまに御給仕するのも、十四歳を過ぎてからは加恵の役目であつた。

そういう格別の家にいたから、於継を見かける機会はなかったけれども、於継の夫である華岡直道が妹背家に現れるときには、加恵は用もないのに祖父の部屋に見舞い顔で出かけていった。加恵自身は風邪もひいた覚えがないほど丈夫だったから、家の中に病人がでたときでなければ医者顔を見ることがない。佐次兵衛に家督を譲って隠居している加恵の祖父は、高齢のために屢々寝こんでは医者顔の世話になった。わざわざ平山まで直道呼びにやらなくても市場村の中にもつと評判のいい医者がいたのだが、隠居は閑を持てあましていて半分は直道の法螺吹話も聞きたくて彼を最賃にしていたのである。だから他の者が病気のときには市場村の医者と呼ばれるのであつた。加恵の祖父以外のものでは直道に脈を見せた者はいない。それでなくても直道の本業は外科であつた。加恵はかつて医者に興味を持ったことがなかったから、直道が家に入入りしていることも、民の口から物語をきいて初めて気がつき、於継の姿を見て帰ってからは、今度は於継の夫というひとを見たいと希つて祖父が体具合を悪くするのを心待ちにしていた。夏のうちは隠居は元気で、加恵が様子を見に行くと鯉の洗いなどをまばらな歯を見せながらびちゃびちゃと舌を鳴らしながら食べていたり、なかなか病気になる気配はなくて孫娘を落胆させた。しかし寒がりの隠居は冬になる

と寝ていたい口実に病気を装い、すると本当に風邪をひいたり頭痛が起きたりした。華岡直道はそういうとき、自ら薬籠を担いで悠々と妹背家の玄関に現れるのであつた。

加恵はしかし待ちに待った華岡直道を見たときは、これが於継の夫かといたく失望した。一筋の乱れもなく結いあげていた於継の丸髻とは対照的に、直道の髪は久しく櫛の歯が通ったとは見えなかった。肌は酒灼けて赭く、大きな唇は上下とも厚く、遅しい歯は乱杭で、あの於継と連ねて考えるには直道は醜く、そして言動に到ってはもう加恵がどういう期待をかけようもないほど粗野であつた。大きな桐の紋附を彼は常用していたが、夜はそのまま寝てしまふのではないかと疑われるほど、それはよれよれで古びて穢く、もう幾年も水を通したとは見えず、つまり紋服の態をなしていなかった。あの鮮かな縞木綿を仕立おろしのようにびんと着付けていた於継が、どうしてこういう夫を持つているのかと、加恵は殆ど当惑した。二人を繋げて考えることは幼い娘には難しかった。

直道の声は大きく割れていて、妹背家の隠居の脈をとるかたらぬうちに世間話を始めていた。世間といつても彼には名手荘などは眼中にないらしく、いつも天下国家の趨勢を論じるのである。隠居もかなりそういう話は好きで、紀州徳川家代々などを論じると深更に及んでも終わらないところがあるのだが、それでも古い話は繰返しながきかなくなるのに、直道の話は今日ただいまの天下の趨勢を新しく知識を仕入れてきて喋

るのだから、話好きの隠居を圧していた。もっとも新しい知識といつても、江戸から遙かに遠い紀州の、それも片田舎で、あまりはやっていない医家の彼の許に風聞のように伝えられるのは四、五年も昔の出来事であったが、激情家の直道はそれを自分で昨日見てきたように感情を移して話すことができた。隠居は充分心得ているから適当に割引いて聴いている。

「僕は断言しますが医学に於て必ず我が国にも蘭方の時代がきます。これは私が大坂の修業時代に師事した岩永蕃玄先生の口癖やったが、その南蛮流を学んだ僕はこの時代を自分の脈で握むことが出来ますのや。江戸では山脇東洋先生が刑死体を解剖して以来、今は杉田玄白先生が蘭方を提唱しておられます。脈一つで推しはかる漢方と違うて、これは人間の体を隅々まで念入りに調べますのや。人体は造化の妙、指一本にも血と肉と骨の他に様々な体液が流れ神経が通っておる。

それを綿密に診てこそ診察と云えますのや。医者に名人はござらん、人体悉く解き明かされれば病には正しい処方があるだけですよつてにのう。公儀もそれを認めて医術の吸収に本腰を入れるようになってゐるのは、まことに喜ばしいことです。和蘭陀よりほうるといふ名医やほんとうの先生が来られてからも、何年になりますか」

直道自身は病人の脈一つろくに診ずに喋っているのであつたが、どういふ話も末はといえ、

「左様、ほうる先生が来られたのは、後で知れば雲平の生れた宝暦十年でしたのう。後でそれを知ったとき、僕は確信を

持ちましたのや。秋たけなわの十月二十三日ですわ、晴れ上つていた空が俄にかき曇つて、やがて眼も眩む稲妻が黒い空を裂いて凄まじい雷を落す。雲平はその最中に生れましたんや。僕はこの腕で取上げて、気がつけばいつか空は明け、鳥が高く飛んでいる。これは麒麟児が生れたのだと僕は大声で叫びましたわ。ほうる先生も日本へ着かれてすぐこの奇瑞に遭われて驚かれたことですよ。ほうる先生の足がこの国に着いたとき、同時に震も生れ出た。これは間違いないことやと思ひますわ。僕はその日の天気を記念に残すため、震と名附けてすぐ通り名は雲平と定めたのです。ええ名前でしょうがの。雲平は必ず将来は新しい空をひろくに違ひないのですわ」

と息子自慢に終るのであつた。

加恵にはこの行儀の悪い直道の、齢より更に老けて見える風態から、彼を精力旺盛な老人と思ひこんでしまつて、そういう子供自身もそぐわないものに聞いた。於継と直道は十四五歳の齢のひらきがあつたのだけれども、妻が齢より若く見え、夫が齢よりふけて見えるためにいよいよそのひらきは大きなものとなつて、どう考えても加恵には於継がこの男の妻だとは思へない。

直道は妹背家を訪れるごとに様々な話をして、最後は必ず雲平の自慢で結んで帰るのであつたが、その自慢話というのは、自慢の種になるのが不思議なほど愚にもつかない事柄が多く、要するに野心満々の直道が子供にかけた期待がいかに

大きいかを示すにとどまっていた。だから加恵は直道の話を経度も彼の息子に格別の興味を寄せることはなかった。それでも加恵は直道が来ると気懸りで隠居の部屋へ顔を出したくなる。直道は減多に自分の口から妻の話をすることはなかった。あの話は彼が吹聴しなくてもすでに有名であったし、男というものは妻の存在を語りたがらないという通性を持っていて、直道もその点では例外ではなかったのだらう。加恵は於継に縁ある者として直道を迎える気持を持ちながら、いつも期待を裏切られ失望していた。

二

祖父が亡くなったとき、加恵はもう十八歳になっていた。

医者好きだったが斃れるまで実は元氣だった老人は、死ぬときも脳溢血で潔く死んでしまい、医者の手になくかかることはなかった。倒れたとき妹背家がまっ先に呼びにやったのは直道ではなくて、妹背家に代々出入りしている他の医者であり、すでにこと切れている隠居にはほどこす手当てもなかった。もう十年も昔から佐次兵衛に家督を譲っていたので、急逝とはいっても何の不都合もおこらず、病みつきもしなかったから、ひとびとは極楽往生だと噂しあった。前の大庄屋の死であったから、葬儀は盛大なものになり、名手莊一帯のひとびとが揃って焼香に来て門前に列をなした。

妹背家の家の中は人を喪った悲しみよりも多くの弔問客を

迎える準備で忙しく、手助けの男女がごった返していて、それは決して陰気な光景ではなかった。加恵はもう充分に人の死を悼むことは知っている年齢に達していたのだけれども、祖父の死はまことに呆気なく悲哀に乏しいものだったので、その直後に始まった賑わいの方にやはり氣をとられて、しみじみとした悲しみを悲しむには間があるようであった。加恵は絹の喪服を着て、髪型は念入りに結い上げていた。適齡期の娘を人目に多くさらす機会に、親の配慮があつたのである。そうして彼女は親しい客の応接に母の後に従って歩き、焼香にきた村人には控えめに会釈していた。

加恵が於継を見たのはこのときが二度目である。直道の方は通夜からずっと奥にきて酒を飲み続けていた。家には帰っていない様子であった。だがむろん於継は夫を迎えにきたのではなく、紬の紋服に朱房の数珠を持ち、焼香の客の群の中に立っていた。於継の喪服姿は、弔問のひとびとの中で水際立って美しく見えた。それはまるで来迎の図の中の菩薩であった。於継の全身から瑠璃色の光が射しているように加恵には見えた。加恵の視線は吸い寄せられたまま動かずに於継を見守っていた。

於継に見惚れていたのは加恵ばかりではなかった筈である。村祭りなどの集いにも於継は減多に姿を見せなかったから、ひとびとは妹背家の葬礼の中で彼女を見かけるとすぐに例の物語を思い出し、指折り数えてそれがもう二十年以上も昔のことだと気がつくや改めて於継の若さに衝たれた。もう

七人もの子供を産んで、普通ならばそうして四十の峠を越せば世帯繰りに疲れて肌も煤け、体つきも萎むか弛むかして醜くなつてくるものであるのに、於継は實際より十年は若く見えたし、喪服を着て面伏せにしている横顔は凜として氣品を湛えていた。於継の姿に瑠璃色の光背を感じたのは加恵ばかりではなかった。

そういうひとびとの視線を於継は意識しているのかどうか。おそらくひとびとの驚嘆する声や視線は於継の若さ美しさを保つためには大層効果的な養分になっていたのであろうし、於継は顔は伏せていても胸を張ってそれらのものを全身に受ける構えをしていたのに違いなかったが、加恵にそこまでする智慧はなかった。彼女は幼い日の記憶が、喪服を身に纏いながら彼女が育てていた以上に美しく冴えわたって再び目の前に立現れたのを、息を呑んで見守っていた。

一般の弔問客は家に上ることを許されず、棺も見えない庭先に用意してある焼香台の前で合掌することになっていた。華岡直道は故人が最良にした医者だということで奥へ通されていたが、その妻まで招じ上げる者は誰もいなかったし、それはこの場合当然のことである。加恵も於継を呼び入れることは思いつかなかった。仮に於継は家内に入るべきひとであつたとしても、そのときの加恵にそんなことを思いつく余裕はなかった。加恵は呼吸することさえ忘れて、目の前を静かに歩いている美しい女を見守っていた。

於継の着ていた喪服は白足袋から草履にいたる一揃えまで

おそらくは嫁にくるとき実家の松本家が整えたものであったのだろう。妹背家の小作人やその家族たち、いや近隣のひとびとの誰よりも於継の身につけているものは段違いに上質で、しかも日頃よほどまめに手入れしているのか古いものとは見えなかった。袖を着ているのは身分をわきまえてのことであらうし、華岡は格の低い家だから光る絹を着る機会はないと心得て、そういう紋附を用意していたのかもしれない。しかしさすがに染色なども業としている松本家の支度だけに、喪服の色は深くて見事であつた。それにしても、衿の抜き具合といい、合せ具合といい、帯の形から締め具合といい、於継には寸分の隙もなかった。焼香台の前に来て深く一礼すると、きりつと結上げた髷にかけた浅葱色の手がらははつとするほど鮮かに美しかった。焼香する指先、数珠を幽かに揉んで合掌する指の形のすんなりとしなやかなのを見て、美しいひとは髪の一筋、指の爪の形までも美しく生れついているものかと、加恵は心の中で感嘆した。しかも於継はただ美しいだけではなかった。その氣品ある物腰は噂に違わぬ賢さを見ているものに感じさせた。焼香を終つた於継は棺が安置されている母屋の方に向つて深々と頭を下げると、門札に立っている妹背家遠縁の者たち一人ひとりに目を止めて丁寧に挨拶をした。門札の後に立っていた加恵は、まさか自分まで於継が氣附くとは思わなかつたので、彼女の視線がびたりと自分の眉間に据えられたときは、小太刀の先を当てられたように緊張し身動きもできなかった。於継の表情には

弔意を表す愁傷の翳りがあって、整った顔立ちはその奥で慎み深く、加恵の心中に気附いた風もなくて挨拶を終えると、やがて体を返して出口へ向った。帯の下で背縫が、まるで絹糸に鉾をつけて垂らしたようにびんと一本の直線になっているのが見えた。その絹糸は歩く足に揺ぎもせず遠ざかった。

三

於継が妹背家に現れたのは、それから三年後の晩春である。加恵は奥にいたが、於継が書見の間で佐次兵衛と何か話しているというので、すぐにも於継の傍へ行ってみたいと思つたが、書見の間は大庄屋をしている佐次兵衛がその事務を執るところで家人は寄りつけないことになっていたから、女中から様子をきくこともできなかった。乳母の民は加恵が近頃夢中になっている紹刺しの糸を繰りに出しに出かけていて、帰りはいつになるか分らない。加恵は残念だったが、そういうときに自分で才覚しようとするような娘ではなかった。いずれ明日にでも父親にどんな話があったのか、それとなく聞いてみようと、加恵はまさか自分に関係のある話とは思わなかったから、それだけ刺繍に熱中していた。

妹背佐次兵衛も於継が何の用で来たのかという想像もつかぬままに、折柄手も空いていたので書見の間に招じ入れた。父親が亡くなって三年目といえ、息子が最も淋しさを感ずる頃である。佐次兵衛も例外ではなかった。彼自身はあ

まり信を置いていない医者ではあったけれども、華岡直道は佐次兵衛の父の死後ふつりと姿を見せない。今になると親と親しんだ者は総て懐しい。於継が突然のように現れたのを訝しく思ひもせず、佐次兵衛は愛想よく自分から話しかけた。

「直道さんは達者かのう」

於継は軽く頭を下げて答えた。

「大旦那さんが亡くなられてから主人も氣落ちしたものと見え、めっきり年をとりましてのし。それで今日は私が名代で伺いました」

「それは御丁寧なことや。してまた何の用事よ」

「こちらの加恵さまを手前どもの震に頂きたく、まかりこしましてござります」

佐次兵衛は驚いた。冗談ではない。妹背家はもと齋部氏より出て、丹生谷の谷域に城を構えていた豪族の裔なのである。今でも紀ノ川の五条から河口までの川添地域の収税警備裁判の権利を委ねられている禄高百二十石の地主なのだ。邸にしても千坪余の敷地に藩主の本陣宿も擁している。何を血迷って出入りの貧乏医者と盃を交し縁戚固めをしなければならぬというのか。

「これは思ひもかけん話やのう」

佐次兵衛は苦笑しながら答えた。暗に釣合う縁談ではないことを悟らせるつもりだったが、於継は胸を張ったまま恥じらいも見せず、加恵を華岡の家に迎えたい理由を述べ始め

た。直道の饒舌にはおよそ似ていなかったが、短い言葉は鋭く要点を衝いて無駄がない。佐次兵衛は於継の気魄に抑えられて終まで聴いてしまった。

それは医家に嫁する女の条件とでもいうべきものであった。第一に身体強健であること。第二に気丈であること。人間の発病に時間の斟酌はないから、夜半といわず未明といわず医者には求められれば直ちに応じなければならぬが、妻は脈をとる心得はなくても夫と気脈を通じて、疲れて戻るまで必ず起きて待つべきである。いづどんな怪我人や悪疾患者が担ぎこまれてくるか分らないが、血を見ても膿を見ても驚くようでは医者の妻は動まらない。人手の足りないときには、血を洗い膿を吸うほどの勇気がなくてはならない。

於継は云った。

「苗を植えて育て秋には刈入れる単調な農事を業とする家の女では、この激しい生活に従えるものやござりません。婚家の家風に従うというてもまるで素養のない者に望むのは無理でございますよってにのし」

更に云った。

「商家の女も医者の妻には不向きやしてよし。医家には算盤がないのですよってに。病は貧富の別なく襲いかかり、患者が金を払えんことも決して珍しくはないのですが、そこに計算高い者がいては仁術に従うものの心に影を落しますよってに」

更に云った。

「ものを工る家業には人を動かす才覚が中に盈ちているものですけれども、医家は門弟が殖えたところでこれを動かして利をとるところとは違いますよってに。それにまた患者先の機嫌をとるようでは医家の嫁としては困りものやしてよし」

於継の論法によれば、およそ医術を志す者と生涯を伴にするには農工商いずれの家に生い育った女も不資格で、したがって武家の娘が最もふさわしいというのであった。

これだけ聞けばその思い上がりだけでも許せない憎々しさを覚えるところで、事実佐次兵衛も同じことを直道が云ったのだったら、ここで勘忍袋の緒を切って怒鳴りつけ、叩き出してしまったらう。しかし女の於継にはどこか犯しがたい美しさとかかを必死に訴えかけている声の響きがあった。そして佐次兵衛の気持を読みとったように、於継は言葉を重ねたのだ。

「かように申しますのも私が農工商を兼ねた家より華岡へ嫁して、我が身が医家にふさわしからぬのを身にしみて悟っているからでございますのよし。直道が大坂へ遊学し当時最新の南蛮流を学びながら今日まで稔り少かったのは、ひとえに家内の私が医家の妻として到らなんだよってやと思うております。私は努め努めて今日まで来ましたが、所詮努力だけでは切拓けんものがあるのを、この齡してようよ気附いたんやしてよし。この春早くより雲平は京都に上り、三年後には必ず何かを掴んで戻ってきますやろう。そう思うにつけ、その掴んだものを充分に育て、雲平の力を思いのたけ伸ばさ